

主 題：イエスの父 — ヨセフ

聖書箇所：マタイの福音書 1章18－25節

今朝はマタイの福音書1章から、イエス・キリストの父ヨセフについて学びましょう。18－25節のところにこの人物について少し記されています。分かっていることは、このヨセフは神に愛され、神に選ばれた人でした。というのは、救い主イエスを神はこの家庭に送られたからです。ヨセフはダビデ王の家系に生まれました。大工として彼はナザレの町に住みました。恐らく、イエス・キリストが十字架にかけられたときにはすでに召されていたと、私たちは推測することができます。というのは、そのキリストの十字架のときにはヨセフについてのことが記されていないからです。マタイ1：18－19にはこのように記されています。「**イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。19夫のヨセフは正しい人であって、**」、マタイは私たちにこのヨセフは正しい人であったということを記してくれています。「正しい人」とはどのような人なのでしょう？同じようなことがルカの福音書1章に出て来ます。イエス・キリストの誕生の約半年前に生まれたバプテスマのヨハネの両親についての教えです。そこにはこのように記されています。ルカ1：5－6「**ユダヤの王ヘロデの時に、アビヤの組の者でザカリヤという祭司がいた。彼の妻はアロンの子孫で、名をエリサベツといった。6 ふたりとも、神の御前に正しく、主のすべての戒めと定めを落度なく踏み行なっていた。**」と、ヨセフとよく似ています。このザカリヤとエリサベツというバプテスマのヨハネの両親に関してルカが教えてくれることは、二人とも神のみ前に正しかった、「**主のすべての戒めと定めを落度なく踏み行なっていた**」のです。「**主のすべての戒めと定めを**」非難されるところがなく行なっていたのです。ですから、この親を見たときバプテスマのヨハネの両親もそうだったし、イエスの父とされたこのヨセフも、どちらも神の前に正しい人であったとそのように記されているのです。どのような意味で正しいと言われたのでしょうか？はっきりしていることは、彼らは間違いなく神を心から愛する人でした。そうでなければ神の前に正しいことは行なえないし、神を愛していなければ神の命令に従おうとはしません。だから、彼らは心から神を信じ神を愛しているがゆえに、神に喜んで従って行こうとするような人たちだったのです。だから、彼らはことばだけでなく神の前に正しく生きたし、実際に神に喜ばれることを実践しようとしたし、同時に、神が悲しまれることはしないでおう、そういうものは避けようとして生きた人たちです。そのように言うことができます。彼らは旧約の教え、律法を正しく守り行なおうとしていました。そうすることによって、救いを得るからではありません。救われた人というのは神の教えに従おうとするのです。これは旧約の時代も新約の時代も同じです。救われた人の特徴のひとつは神の教えておられることに従って行こうとするのです。まさに、このヨセフという人はそのような人であったということが、私たちはこのみことばを通して見ることができます。そして、彼が本当に神の前に正しい人であったこと、神を心から愛していたということは、彼自身がどのように生きたのか、彼が行なった様々な選択がそのことを私たちに明らかにしてくれています。

☆ヨセフについて

1. 人を愛する人だった

18－19節からそのことが分かります。彼はマリヤを愛しました。マリヤへの愛がそのことを証明します。18節に「**その母マリヤはヨセフの妻と決まっていた**」と記されています。まだ、彼らは結婚をしていませんでした。どういうことをいっているのか、私たちがみことばを理解するときに知らなければいけないことは、その当時の習慣がどのようなものであったのか、彼らの結婚がどのようなものであったのかということを知る必要があります。ですから、簡単に説明します。パークレーという神学者が非常にうまく説明しているので、その箇所を読みます。三つの段階があり、一つ目の段階は婚約だと言います。「しばしば二人がまだ子どものときに決められた。普通は両親か専門の仲人によって決められた。当人どうしは互いに会っていない場合も少なくなかった。結婚は人間の情や思いつきに任せるには余りにも重大な事柄だったからだ。」と、日本の場合とよく似ています。だれかがそのようなことをアレンジしたのです。当人たちはよく分かっていたけれども、周りの人たちによって決められた、それが婚約だったと言います。次に、許婚、結婚を認める、いいなづけと言いますが、「2段階目はこうです。いいなづけとは先に取り決めた婚約を承認することである、両親は仲人によって決められた婚約という段階で、娘が結婚する意志がない場合はその約束を破棄することができた。しかし、ひと度いいなづけになると、絶対に解消することはできなかった。いいなづけの期間は1年で、その間二人は対外的には

夫、妻として取り扱われたが、まだ、夫や妻としての権利はもっていなかった。いいなづけは離婚以外には解消できなかった。マリヤとヨセフはこのいいなづけの関係にあったのである。もし、ヨセフがこの関係を中断しようと思えば離縁するより他になかったのである。このいいなづけの期間、マリヤは正式に彼の妻として知られていた。」、これが第2段階目です。婚約があって許婚がある、そして、最後に結婚式があるのです。これはいいなづけの期間が終わったときに行なわれます。ですから、大体、婚約して1年後に結婚が行なわれます。これがユダヤ人たちが行なった結婚だったのです。こういう手順で彼らは結婚していったのです。ですから、イエス・キリストの母マリヤとヨセフに関して私たちが覚えておかなければいけないことは、彼らはいいなづけとして約1年間の期間を過ごしていたということです。おもしろいことは、この婚約が成立すると、ユダヤ人の間では結納金を男性の側から娘の父親に支払いました。日本とよく似ている部分があります。

さて、今私たちが見ているのはこの婚約期間中のことです。このときに何が起こったのか、マリヤの妊娠が分かったのです。恐らく、それを聞いたヨセフは非常なショックを受けたはずです。それでそこに選択肢が生じました。どのような選択肢でしょう？19節を見ると「**彼女をさらし者にはしたくなかった**ので、…」とあります。つまり、夫ヨセフは彼女をさらし者にすることもできたのです。この「**さらし者**」にするというのは、公衆の面前で彼女の罪を明らかにすることです。公衆の面前で彼女に恥をかかせるということです。ヨセフはそれを望まなかったと言います。確かに、この当時も、旧約聖書の教えがユダヤ人たちの間ではしっかり生きていました。申命記22章を見ると、性的罪を犯したときにどのように扱うべきなのかということが記されています。たとえば、結婚のときに彼女が処女でなければ石打にされとか、不倫についても見つかったときには二人は処刑されとか、婚約中に処女と町で罪を犯した場合は二人とも石打、但し、それが野であつたら男だけが処刑される、婚約していない女との罪は彼女の父親に銀50シェケルを支払い、彼女と結婚し一生彼女を離縁できない、とこのようなことがそこには記されています。つまり、神はこのような性的な罪を憎んでおられるのです。申命記22：22には「**…あなたはイスラエルのうちから悪を除き去りなさい。**」と教えられています。今のこの世の中はどうでしょう？性的なきよさはどこでも教えられていないし、何をしてもかまわないとされています。みことばの基準に立つなら、この世の中はいかに神の前に間違っているかが明らかです。神の前にきよさを保ち続けて行くというのは大切なことです。性的に自らをきよく保つということは大切なことであり神が喜ばれることです。決して、この世の中の偽りに惑わされてはならないのです。神が望んでおられることは、あなたが神の前に性的にきよくあることです。

さて、このような教えを知っているヨセフ、このように自分を裏切ったマリヤに対して、彼女を人々の前でさらし者にするという選択もあったのですが、ヨセフがしたことはそうではありませんでした。彼はマリヤをさらし者にはしたくなかったのです。彼はそれを望まなかったのです。それが彼自身の選択したことでした。もちろん、よく考えて見ると、罪の中を歩んでいる人はその心から神は喜びを奪って行かれます。感謝がなくなっていく。どんなにうまく装っても罪は明らかにされていきます。マリヤを知っている人は皆思ったことでしょう。彼女の心の中にある喜びや感謝を見ていると、彼女は間違いなく神に祝されている、彼女は正しく歩んでいることが明らかだと。ですから、ヨセフはこうして自分の婚約者が罪を犯したことを知ったときに、彼はマリヤをさらし者にはしたくない、人々の前で彼女の妊娠を明らかにしたくない、だから、彼はマリヤを「**内密に去らせようと決めた**」のです。離婚しようとしたのです。先ほど見たようにこの当時、そのことができたのです。しかも、ヨセフは彼女を「**内密に去らせよう**」、つまり、公にすることなく、証人たちを三人以上集めてそこで彼女に離縁状を渡して彼女を去らせるということをしないでというのです。確かに、ヨセフはそうのように考えていました。20節を見ると「**彼がこのことを思い巡らしていたとき、**」とあるように、彼はこうしなければいけないと思っているのですが、その心の中にはためらいがあったのです。なぜなら、そのような罪を犯したマリヤのことを聞いたときに、ヨセフはそれでもマリヤのことを愛したからです。皆さんがそのような状況にあったらどうでしょう？自分の伴侶が自分を裏切ったと聞かされたら…。普通なら、それに怒りをもって接することもできるでしょうし、まさに、このみことばが教えるように「**さらし者**」にすることもできるかもしれません。それを公にすることでこの人はこんな罪を犯したと仕返しをすることもできます。そういう人は多いです。なぜなら、人間は自分が傷ついたなら黙っておれない、それを倍にしてでも返したいと思うのが私たちの罪です。私をこんなに傷つけた、だから、あなたもその苦しみを味わうべきだとして仕返しをしたくなるのが、悲しいことに私たち罪人です。

ヨセフの場合はどうだったでしょう？彼はそのようなことを聞いてもマリヤへの愛を失わなかったのです。見て分かるように、彼は感情によって行動していません。彼はだれもがもっても仕方ないと思うような怒りをもって行動していません。彼はマリヤのことを考えます。彼女をさらし者にしたくなかった、彼女を公衆の面前で責めて恥をかかせるようなことをしたくなかったのです。それはまさに愛です。

罪を見て見ぬ振りをする、それは愛ではありません。罪は正しくするべきです。神はそうにされます。しかし、愛は喜んでその友のために自分のいのちを捨てることです。**「人がその友のためにいのちを捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」**とヨハネ15：13でイエスは言われました。一番大きな愛とは人のために自分の一番大切ないのちを捨てること、それ以上の愛はないと。また、パウロはこのように言っています。**「3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。4 自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。6 キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。」**（ピリピ2：3－7）と。パウロが言ったことは、イエスを見てご覧なさい、すべてのものをお造りになった神であられるのに、彼はすべての人間に仕える者になられた、神がなさったことはご自身のことよりも私たち罪人である人間のことを考えてくださり、その罪を赦すために喜んでご自分を犠牲にしてくださった、これが愛だと言います。このヨセフを見たとき、彼は自分がどんなに傷ついても、自分がどんなに悲しくても、自分がどんなに裏切られた思いをもっている、彼はマリヤのことを考えて、彼女にとって何が良いことなのかを考えたのです。だから、正しい人なのです。まさに、彼自身のうちには神の愛があり、彼を通して神の愛が明らかにされているのです。なぜなら、このような愛をもって人を愛することは私たち人間にはできないことだからです。自分を犠牲にする愛は神の愛であり、そのような愛が彼のうちにあったというのは彼が信仰者だったからです。彼が神を愛していたからです。神の愛によって行動していた人、それがこのヨセフでした。

2. 神を愛する人でもあった 19－25節

神を愛するとは、神のみことばに常に従順に従おうとすることです。神のみことばに従うことを最優先したのです。なぜなら、神を愛しているからです。皆さん、私たちは「私は神を愛している」と簡単に言えます。でも、神を愛するとは神の命令を守ることです。神のみことばを最優先するなら、私たちはその行ないによって、私たちが神を愛していることが明らかにされます。言うことは簡単です。しかし、神は私たちの心の中を見ておられます。神が私たちに望んでおられることは、私たちが本当に神を愛する者として成長することです。言い方を変えるなら、神のみこころに、神のみことばに忠実に従って行く者になって行くことです。ヨセフを見たとき、彼は人を愛する人でした。同時に、彼は神を愛する人でした。なぜなら、神のみことばに従うことを最優先したからです。もう一度19節を見てください。**「夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。」**とあります。**「内密に去らせる」**とは先ほども言ったように離婚のことです。ユダヤ人の慣習によればそのようなことがなされたのです。ユダヤ人の間ではそのようなことが頻繁に行なわれました。なぜなら、ユダヤ人の社会では女性は人ではなくて物だったからです。そのように女性を冷遇したのです。そこで、神の命令ではなく、確かに、申命記24章の中には離縁をするならこのようにしなさい、離縁状を渡しなさいとモーセが記しています。それは、離婚を勧めているものではありません。神が望まれることは離婚をしないことです。しかし、婚約期間中にそのような罪を犯したときには、先ほど申命記22章を見たとき、厳しい神の取扱いがあります。このような教えがあるのです。だから、ヨセフはその教えを見て、それに基いて彼女を扱うことができたのですが、22章の教えを見ると、そのような罪がはっきり証明されたとき、ヨセフにはマリヤに何が起こったのか分かっていません。ただ分かっているのは彼女が妊娠しているということ、そして、その相手は自分ではないということです。そこでヨセフが思ったことは、彼女のことを愛しているし、彼女を信頼してきた、それは何ら変わっていないけれど、現実には彼女は妊娠している、悲しいけれど彼女は神の原則に背いてしまった、間違いなく自分ではないだれかとそのような肉体関係があったから、だから、このマリヤと自分はいつしよになることはできない…。私たちが見ることができるのは、ヨセフはマリヤを本当に愛していた、自分のことよりも彼女のことを優先しました。そのような愛をもっていたヨセフは、その彼女に対する愛よりもみことばに対する愛を優先したのです。どんなに彼女を愛していても、彼女がみことばの原則に反したのであれば、私はみことばに従わなければいけないとしたのです。私たちの日々の生活においてもそのような選択はたくさんあります。私はこう思う、私はこれが最善だと思う、でも、みことばがそれと違うことを教えているのであれば、私たちがもし神を愛するのであれば、みことばに従います。まさに、私たちはこのヨセフがそのような選択をしていることをここに見るのです。彼は自分のその思いよりも神に対する忠誠心を優先するのです。神のみことばに対する忠誠心を彼は優先するのです。それが自分の感情に逆らうことでも、自分の考えと異なろうと、私は神のみことばに従う、なぜなら、私は神を愛しているから…。と。

どうでしょう？そのような信仰をあなたはもっておられますか？何があっても神が言われたことであれば私は従って行こうという信仰です。そういう人をこのように言います。その人は神を愛している人だと。都合の良いときだけ神を愛するものではありません。どんなときでも、神を愛するというのは神の

みことばに従うことです。徹底的に。

ヨセフは神のおことばに従おうとしただけではありません。「**彼がこのことを思い巡らしていたとき、**」彼は眠ってしまいます。みことば見たとき、このように神の原則に背いた人といっしょになってはいけない、そのことはヨセフの心を大きく傷つけたでしょう。悲しませたでしょう。彼は涙を流してそのことを考えていたことでしょう。そうするうちに彼は眠ってしまったのです。すると、「**主の使いが夢に現われて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。」**」と20節に記されています。続いて、21-25節「**:21 マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」:22 このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。:23 「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」**（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）**:24 ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、:25 そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。**」、御使いが現われ、御使いが語ったことに対して、ヨセフはそれをそのまま受け入れて、それに従って行くのです。彼は彼女を妻として迎え入れました。そして、彼はこの生まれて来た男の子に「イエス」という名前をつけました。「イエス」とは主は救い、主の救いという意味をもったことばです。旧約の時代、同じ意味をもったことばを見ることができます。ヘブル語では「ヨシュア」です。そのギリシャ語形が「イエス」です。あのヨシュアはイスラエルの民を連れて約束の地へと導き入れました。このヨシュア—イエスは私たちをその約束の地よりもはるかにすばらしい約束の天へと導くのです。そのような方です。イエスは信じるすべての者を救うことができますのです。ですから、21節に「**この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。**」と、イエスだけが人間の罪を赦すことができる方だと、イエスだけがあなたをその罪から救い出してくださる救い主であると、そのように天使が告げたのです。そして、その天使のメッセージをヨセフは受け入れるのです。

何という祝福を神は彼に与えたのでしょうか。救い主の父です。でも、分かっているのはヨセフはイエス・キリストの実の父ではありません。血がつながっていないことは明らかです。なぜなら、みことばが教えているのは「**聖霊によって宿った**」と教えているからです。18節「**…聖霊によって身重になったことがわかった。**」、20節「**その胎に宿っているものは聖霊によるのです。**」。ですから、確かに、イエスの父と呼ばれそのように扱われたヨセフ、しかし、実の父でも血のつながった父でもありませんでした。聖霊によってこのイエスは受肉したのです。だから、彼は私たちの罪を赦すことができますのです。人々はこの当時、聖霊なる神はどのような働きをするのか、それは創造をなさった方、創造のみわざをなさった方だと信じていました。創世記1:2に「**地は形がなく、何もなかった。やみが深い水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。**」と記されています。まだ、神が太陽や月、星などを創造する前のことです。まだ地に何もなかったときに「**神の霊は水の上を動いていた**」のです。ですから、ユダヤ人たちはこの神の霊、このお方はすべてのものをお造りになるお方だと信じていたのです。ヨブ記33:4には「**神の霊が私を造り、全能者の息が私にいのちを与える。**」とあります。ですから、ユダヤ人の間ではこの神の霊、聖霊なる神はこの世界の宇宙のすべてのものをお造りになったお方、そのような働きをするお方だから救い主をこの世に送るという奇蹟を行なうことができると信じたのです。なぜなら、この世界のすばらしい自然界を造られたお方は救い主をこの世に送ることもできるからです。

そして、それだけではありません。信じる者のうちに奇蹟の救いのみわざを行なうことができる、そのような力をもっておられるのです。ですから、天使がヨセフにマリヤのお腹に宿っているものは聖霊による、聖霊なる神がそのような働いたのだ、聖霊なる神が働いてマリヤの胎に男の子を与えた、すべてのものを造られた神がそのようなわざをなさった、だからこそ、生まれて来る子は信じるすべての人の罪を完全に赦すことができる救い主であると言うのです。イエスは確かに私たちをその罪の罪悪感から解放してください。私たちは心の中でよく分かっています、どれほど大きい罪を犯しているかと、私たちの心の中には罪が存在することが分かっています。神はそのような私たちを完全にきよくしてくださる、「**…キリストの血によって義と認められた私たちが、**」（ローマ5:9）とあります。イエスの血によって私たちは完全にきよくされるのです。イエスはあなたを罪の罪悪感から解放してくださる、同時に、イエスはあなたを罪の力からも解放してください。ローマ8:2に「**なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。**」とある通りです。私たちは生まれながらに罪に対してどうすることもできなかった、もう止めようと決心しても私たちはそれを実践することができませんでした。しかし、感謝なことに、イエスによって私たちはそのような罪から少しずつ離れて行くことができますのです。また、私たちは罪の結果からも解放されます。生まれながらの人間は罪を犯し、その結果、私たちは永遠のさばきへと向かっています。でも、神はその罪から、罪の結果から私たちを救い出してくださるのです。イエス・キリストによって罪赦された者には永遠のさば

き、永遠の地獄は無縁のものとなったのです。ローマ5：9には「**ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。**」と、罪赦された者は神の怒りに会うことがないのです。

もうひとつ加えるとするなら、イエス・キリストは私たちを罪の存在から解放してくださいます。私たちは悲しいことにイエスを信じた後も罪をもっています。古い性質をもっています。私たちはその葛藤の中を生きています。正しく生きたいとする私と罪の中を歩むようにと誘惑する罪との葛藤です。しかし、「**キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。**」（ピリピ3：21）とパウロが言うように、私たちの罪深いこのからだを神は生まれ変わらせてくださる、栄光のからだへと変えてくださるのです。罪を犯すことのない者へと変えてくださるのです。このすべての約束、すべての解放はイエスを信じることによって私たちに与えられるものです。罪悪感からも解放されるのです。私はきよめられた、私は救われた、私は罪赦されたのです。私たちは私たちを支配して離すことのなかった罪の力から解放されます。私たちは神の助けによって変わって行くのです。私は今日死んでも天国へ行くことができる、なぜなら、罪赦されたからです。そして、後には私はこの罪のからだからも解放されるのです。罪を犯すことのない栄光のからだを与えられるのです。このようなすばらしい解放はイエスがもたらしてくれるのです。では、なぜイエス・キリストがそのような力をもっているのでしょうか？イエス・キリストの誕生は聖霊によることだったから、神のわざだったからです。神のなさった奇蹟だったからです。このイエス・キリストによって人間にはできなかったことを神がしてくださったのです。「**その名をイエスとつけなさい。この方こそ（この方だけが）、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。**」、私たち人間にすばらしい希望をもたらしてくれる方です。神はあなたがどのような人か知っておられます。あなたのすべての罪をご存じです。その上であなたの罪を赦してあなたを生まれ変わらせ、あなたを新しい者にしてくださるのです。大きな希望です。すばらしい神の恵みではありませんか？

このすばらしい救い主がこの家庭に与えられたのです。なぜ、この家庭に与えられたのか、ヨセフは神の前に正しい人だったからです。どれほど神はそのような人を喜ばれるか、どれほど神はそのような人を愛しておられることでしょうか。ヨセフは間違いなく神を恐れ神を愛して生きる人でした。ですから、今、見て来たように彼は神の愛によって生きた人物であつたし、神のみことばに忠実に従った人でした。人を愛し神を愛する人でした。神の言われたことには忠実に積極的に従った人でした。この男の子にイエスという名を与えたのはヨセフです。彼はその家庭にあってもしっかりとそのリーダーシップを発揮しました。使徒の働き6：3を思い出してください。「**そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。**」、教会のリーダーとしてこのような人を選びなさいと教えられています。まさに、私たちはこのヨセフがそのような人物であつたことを見ます。神によって支配されていたから彼は神の愛を実践しました。彼は知恵に満たされた人であつたから、感情や状況に流されてしまうのではなく、どんなときにも何が神の前に正しく、何が神を喜ばせるかを考えてそれを選択し行動した人でした。ですから、使徒6：3でこのような人を教会の霊的リーダーとして選びなさいと言われた神のその基準が、まさにヨセフに当てはまります。

今日は父の日です。お父さんの皆さん、これからお父さんになろうとする皆さん、男性の皆さん、神はあなたを変えられることができますし、あなたを用いることもできます。しかし、このようにヨセフが用いられたのは彼が神の前に正しい人だったからです。彼が心から神を愛した人だったからです。それはことばだけでなく実践によって証明されたのです。そういう人を神は喜ばれるのです。あなたはそういう人ですか？あなたはそういう人になろうとしておられますか？今、私たちの国に必要な男性のクリスチャンはこのようなクリスチャンです。神を心から愛してみことばだけに従って行こうとする人です。あなたがそのことを望みそのような歩みをしようとするなら、神はあなたを助けてそのようにあなたを変えて行ってくださいます。私たちににとって一番難しいことはそのように神が望んでおられることが何か分かっているのに、それに従おうとしないその罪、頑なさが問題なのです。あなたが今日、神の前に「神さま、どうぞ私を変えてくださってあなたの前に正しく歩む者にしてください」と、そのような決心をもって歩みを始められることを心からお勧めします。

女性の皆さん、信仰者として生きるというのは同じことです。マリヤもその通りでしたから。彼女も正しかったのです。みことばを見ると女性に対する基準と男性に対する基準に違いがあるのではありません。神が望んでおられるのは、今日見て来たように、神を心から愛してみことばに従って行く人です。そのような女性になってください。

クリスチャンでない皆さん、同じことを神はあなたに望んでおられます。今のあなたの歩みは神に逆らっています。その歩みを悔い改めることです。チャンスはあります。生まれ変わるチャンス、すべて

の罪が赦されるチャンスは残っています。でも、そのためにはあなたがそれを選択することが必要なのです。今日がその日になるように心からお勧めします。今日、あなたがこのイエスをお信じになること、そして、このすばらしい救いをご自分のものにされることを心から願います。